

絵画と詩と音楽でつづる もうひとつの水俣

ドキュメンタリー映画 (112分)

水俣の図・物語



三つの表現による“水俣の像”

映画ではいわゆる音楽映画は別として、その音楽は映画のテーマをもとに作曲され、指定の個所に録音される。ナレーション・詩も音楽同様、時間に解析され、秒単位の計算でシーンにつけられ、映画の効果あげる。

この映画『水俣の図・物語』の場合、その種の伴奏性をはじめからとらなかった。詞(ことば)と音楽と絵画による「それぞれの光芒のなかでの水俣の像のフォーカスの一致」といったものを試みた。映画の諸属性の制約から離れ、自由な詩想と楽想をたよりにした。丸木夫妻の『水俣の図』自体、もとより絵画の表現として完結しており、映画のために描かれたものではない以上、詩・音楽もそれと同等同位におくべきであると考えた。

絵画を分析した映像と、詩『原初(はじめ)より言葉知らざりき』・音楽『海へ』がひとつにあわされたのは最終ダビングのときであり、いごなんらの編集的加工もしていない。

映画としては一回性の実験であった。が、これは現代水俣病事件の、精神への照射の、多角的で多岐・多彩であることから生まれた方法であった。それは、同時に、表現者たちの、ただいま現在の記録ともなったのではなからうか。

映画『水俣の図・物語』パンフレットより

日時 **2018年11月10日(土) 17:30** ~ (17:00開場) 場所 沖縄県立博物館・美術館 講堂(3F)

かいえんしゃ

海燕社の小さな映画会2018

後援：
沖縄県
那覇市



料金 **1,000円**(要予約) 予約/問合せ **098-850-8485** / mail@kaiensha.jp (カイエンシャ)

水俣の図：丸木 位里／丸木 俊 詩：石牟礼 道子 音楽：武満 徹
監督：土本 典昭

製作：高木隆太郎 撮影：瀬川順一／一之瀬正史 第23回毎日芸術賞／第6回くまもと映画祭／1981年度芸術祭参加作品／優秀映画鑑賞会特別推薦／日本映画ペンクラブ推薦 配給：シグロ

…水俣をしばらく描くべきか、答えられる人がいるだろうか。制作の三か月、苦行のようであった。俊さんが母子像や胎児や数しれない受難者、そして鳥、魚ども、たこ、いかなど生きとし生けるものの細部までかきこんだ上に黒々とヘドロのような墨を重ねていく。白い麻紙に黒い描線でかかれた少女の胸に墨がどろどろとぬられていく。汚され、汚くなっていく。私はいたたまれぬ思いもした。そのとき二人も苦しみ迷いながみながらの仕事であった。80年秋、ともかくもう一度水俣にこうということになった。患者さんをスケッチする気持の余裕もなかったこの前の心残りをはたすことが目的だった。「スケッチして差上げればどうかしら」と俊さんはいう。それは喜ぶにきまっている。映画をとる私は、いつも肖像をカメラできり盗ることにうしろめたさをもって

いる。描いて上げれば、絵かきは学べ、患者はよろこぶ — こんなすてきな対面の仕方があろうか。私は羨望した。このスケッチ旅行は一挙に二人を解放した。私の見たこともない患者の晴れぱれしたした顔にも遭ったのである。リアルなカメラでの肖像でなく、丸木夫妻の眼ざしで映じた患者の肖像から「病んでさら



に輝く生」といったものが描かれはじめた。胎児性の女性患者、加賀田清子さん、坂本しのぶさんの肖像で二人の水俣発見は頂点に達したかのようだ。「病むことでさらに輝く美しさ」「死のはざまで見える生そのもの」。「これらをあの娘たちで教えられた」と位里さんはいった…「水俣の図」を描くための旅(土本典昭)

“海燕社の小さな映画会2018/11月会”へのご支援ありがとうございます。

常設展「沖縄戦の図」

丸木位里・俊の描いた「沖縄戦の図」は、地上戦である沖縄戦を体験した方々の証言に基づき、その人々がモデルになって描かれたものです。

佐喜真美術館

〒901-2204 沖縄県宜野湾市上原358 TEL 098-893-5737 FAX 098-893-6948
ウェブ <http://sakima.jp> メール info@sakima.jp

